

# 石巻市南浜・門脇地区における震災学習プログラムの変化の事例を通じたソフト／ハードの震災伝承実践の統合的議論に向けた検討

The Study for Discussion Combining Soft and Hard Disaster Memorial Practices through the Cases of Change in Disaster Education Programs at the Minamihama-Kadonowaki District, Ishinomaki City

浅利 満理子<sup>1</sup>, 佐藤 翔輔<sup>2</sup>  
Mariko ASARI<sup>1</sup> and Shosuke SATO<sup>2</sup>

<sup>1</sup>公益社団法人みらいサポート石巻

Ishinomaki Future Support Association

<sup>2</sup>東北大学災害科学国際研究所

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

After the Great East Japan Earthquake on March 2011, various earthquake learning programs which are being implemented while responding to the circumstances have been provided in the areas affected by the tsunami. This paper, through focusing on the construction of tsunami memorial facilities and the change of disaster education programs in Minamihama-Kadonowaki districts of Ishinomaki City, summarizes the interactive features which are considered important in discussing the relationship between soft and hard elements.

**Keywords :** *the 2011 Great East Japan Earthquake Disaster, disaster memorial, disaster education program, memorial site*

## 1. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災で被災した各地では、屋内会場での講話、被災した地域の徒歩での案内やバスや乗用車、タクシーに同乗して行われる案内、特定の震災遺構や展示施設に特化した案内など様々な震災学習プログラムが、主に域外からの来訪者に向けて提供されている。こうしたプログラムはボランティア活動や被災地域での買い物等と組み合わせられて実施されたり、震災学習を第一義的な目的としない観光旅行の行程に組み込まれるなど、多様な利用の仕方がされてきた。

筆者らは、宮城県沿岸8市町を対象に、2017年春時点での震災学習プログラムの受入れ数増減の傾向と震災伝承拠点の整備状況や集約度合、アクセスとの関連を整理し類型化を試みた<sup>1)</sup>。その際、複数の地域の比較を行い、宮城県における震災学習プログラムの受入れ数は全体として減少傾向にあるなか「ハードの拠点と地理的なイメージの形成を助け、それらをさらに充実させるソフトの要素として震災学習プログラムの有用性を併せて提示していくことが望まれる」と結論したが、ハードとソフトを具体的に関連付けて議論できたわけではなかった。

本稿では、その反省を踏まえ、復興祈念公園や震災遺構が整備される石巻市南浜・門脇地区において、これまで行われてきた震災学習プログラムの内容とその変化の事例を通じて実際の震災伝承活動におけるハードとソフト関係の特徴を整理し、有効な震災伝承活動の継続に向けた実践的課題について検討したい域の状況に応じた震災伝承活動の活性化と有効な伝承実践のあり方について議論を推進するための試論と位置づけ、まずは具体の事例について拠点（または施設）とプログラムを関連付けながら状況と論点を整理することを目指す。

## 2. 石巻市南浜・門脇地区と震災伝承活動

この章ではハード整備も含めた地域の状況について概観する。南浜・門脇地区にはこの復興祈念公園と震災遺構の旧門脇小学校校舎を含む震災伝承関連施設が複数集積し、2011年以降石巻市における一つの震災伝承の拠点を形成してきた<sup>2)</sup>。

### (1) 地域の概要

本稿で「南浜・門脇地区」と呼ぶエリアは、石巻市の中心市街地から車で数分の距離にある一帯で、主に、雲雀野町一丁目・南浜町一丁目～四丁目・門脇町二丁目～五丁目の辺りを指す。北側は標高56mの日和山に、東側は旧北上川河口部に、南側は石巻湾に、西側は工業地帯に接する。2011年3月11日以前は、1,800世帯/4,500人以上の住民が暮らし、市立病院や文化センター、小学校といった公共施設、その他生活に必要な店舗等も多数擁する住宅地であったが、東日本大震災に伴う大津波により、街全体が流出し、多くの人が犠牲になった。

震災後は更地になったが、南光門脇線以北の門脇町は盛土され、「新門脇地区」として約150世帯分の災害公営住宅を含む宅地が造成された。2016年6月には、震災前の門脇町二丁目～五丁目にあった町内会が合併するかたちで「かどのわき町内会」が発足している。

一方で、南光門脇線以南の地域は災害危険区域に指定され、居住不可能となったが、この一帯に国営追悼施設を含む復興祈念公園が整備されることが2014年10月に閣議決定され、2020年度中の完成を目指し、2017年3月より建設工事が行われている。

### (2) 新門脇地区の震災伝承関連施設

全体が盛土され、新しい街に人が戻ってきつつある新

門脇地区は、堤防道路を隔てて災害危険区域に接しているほか、街のなかに被災の痕跡を残す旧門脇小学校の校舎が遺されていることから、震災を伝える活動と切り離すことのできない地域である。

門脇町四丁目に位置し、南浜・門脇地区一帯を学区としていた旧門脇小学校の校舎は、東日本大震災に伴う津波と火災によって大きく被災した。住民の間でも保存／解体で意見がわかれていたが、2016年3月に石巻市が震災遺構として一部または部分保存することを発表して以降、整備のあり方検討が進められてきた。2016年度には「旧門脇小学校校舎に関する震災遺構検討会議」が開催された<sup>2)</sup>。有識者、地域住民、NPO、行政の関係者によって構成され、石巻市で策定する「震災遺構整備計画」に幅広く意見を反映させることを目的とする<sup>3)</sup>全5回に渡る会議を経て、2017年6月に整備方針が発表された。プロポーザルによって2018年3月に整備業者が確定し、6月現在、設計に向けた住民ワークショップが実施されている。

一方で新門脇地区では住民の自助努力による遺構等の保存も行われている。旧門脇小学校にごく近い場所に位置する築120年を超える歴史的建造物「本間家土蔵」は被災後修復され、2014年4月より公開されている。また、土蔵に隣接する「まねきショップ」の敷地内において、震災前に旧門脇小学校校舎校舎にあった二ノ宮次郎像が修復され、設置されているなど、この一帯は同地区の震災伝承拠点としての機能を有している。

### (3) 新門脇地区の震災伝承関連施設

南光門脇線以南のエリアは、東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手・宮城・福島の3県に建設される国営追悼施設を含む復興祈念公園の一つとして2017年3月以降、石巻南浜津波復興祈念公園建設工事が実施されているが、その最中であるにもかかわらず震災伝承の活動が継続されている特殊な地域でもある。

そもそも、復興祈念公園の建設が決まる3年以上前、東日本大震災から丸1か月後の2011年4月11日に、門脇五丁目に住居兼店舗を持っていた住民を含む市民団体によって、その跡地に「がんばろう！石巻」看板が設置された。津波に負けたくない、地域の方を励ましたいという思いで設置された看板は、慰霊・追悼の場として、あるいは被災地視察や震災学習の場として、年間10万人規模の人が訪れる屋外伝承拠点となっていた<sup>4)</sup>。

2015年11月にはすぐ隣に「南浜つなぐ館」が設置され、当初は土日祝日のみの営業ではあったものの屋内の伝承施設も併設されることとなった。また、2016年4月に現在の南浜三丁目のエリアに移動すると同時に、地元中学生とともに制作した2代目看板が設置された。その後、公園に植樹する苗木を育てる「こころの森」のビニールハウスも近くに設置されるなど、看板を中心に拠点が広がり、多機能化していった。

復興祈念公園の基本計画においても「市民活動」の存在が強く意識されており、「元住民をはじめとした市民が公園に集い、震災伝承活動や環境保全活動など様々な活動ができ、市民が交流できる拠点を整備する」ことが明記されている<sup>5)</sup>。復興庁（国）・宮城県・石巻市の三者が整備主体となっており、この基本計画は、有識者会議、元住民意見交換会、市民フォーラム、パブリックコメント等を経て、2015年8月に発表されたものであるが、この時点ですでに民設民営の震災伝承拠点の存在や民間の伝承活動を前提になっていることがわかる。後に「参加

型維持管理運営」検討協議会と呼ばれる、市民団体を含む関係主体が開園後の運営について検討を行う協議会が設置されたことも、同公園における他に類例のない特徴であると言える。

復興祈念公園には、展示機能を持つ中核的施設や追悼空間が整備されるほか、園内の数か所に震災遺構を保存することも決まっている。



図1 復興祈念公園のイメージ（「平成30年度第1回石巻南浜津波復興祈念公園有識者委員会資料」より）

## 3. 南浜・門脇地区における震災学習プログラムの実施経緯と変化

本章では、南浜・門脇地区において、どのように震災学習プログラムが行われてきたかを整理し、それらが辿ってきた変化についてまとめる。

### (1) 震災学習プログラムの実施状況

復興祈念公園の有識者委員会や石巻市の震災遺構検討会議／震災伝承検討会議において、伝承活動においては前章で見たような施設間／地域間の連携が重要であるという意見がしばしば聞かれる。実際には未整備なのでこれからの課題であるが、一方で、そうした体制が整っていない時期から、民間主体によるソフトの取組みが実施されてきた。以下では、現在有料で提供されているプログラムについて<sup>6)</sup>、種類別に実施状況を簡単に整理する。

#### a) 車両による案内

石巻地方では多くの個人・団体が震災学習プログラムを提供しているが、2011年夏以降案内を行っている石巻観光ボランティア協会をはじめとする複数の団体が、バスや乗用車、タクシーに同乗してガイドを行っている。



図2 バス等に同乗し地域を案内する「石巻・大震災まなびの案内」（石巻観光協会WEBサイトより）

石巻に限らず、東日本大震災で被災した沿岸地域では、よく見られる形態のプログラムであるが、石巻の中心市街地等を出発するコースの場合、「がんばろう！石巻」

看板や旧門脇小学校校舎のある南浜・門脇地区に立ち寄り、（天候や時間的余裕にも拠るが）一時下車し見学するコースを多くの語り部・ガイドが採用している。

#### b) 徒歩による案内

南浜町は周辺で復興祈念公園等の工事が行われているが、工事期間中も活動が認められた「市民活動拠点」を中心に現地を歩くプログラムも実施されている。

#### c) 震災遺構付近での案内

震災遺構の旧門脇小学校校舎は、現在立入が禁止されており、地域住民や校庭利用者への配慮からフェンスで覆われているが、学校の前には新しい公道が整備されており、隣接する墓地等からはかなり間近に見えるため、震災学習プログラムで付近を案内することも可能である。近隣で被災した住民や門脇小学校関係者が語り部として、震災当時の状況を伝えながら案内する場合が多い。

#### d) 講話

2018年6月時点、南浜・門脇地区には本設の建造物で講話が可能な場所はないが、小規模な仮設の展示施設である南浜つなぐ館において講話やトークセッションが行われている。展示を見るだけでなく元住民のお話を聞ける機会が設けられるなど、展示施設も多様な利用のされ方をしている。



図3 南浜つなぐ館で定期的に行われている公開語り部

#### (2) 震災学習プログラムの変化

南浜・門脇地区においては、大別すると上記4種類の形態で有料の震災学習プログラムが提供されてきた。

一方で、これらのプログラムも、開始時からずっと同じように実施されているわけではなく、周囲の環境が変化するなかで、様々な課題に対応し、変化しながら継続されている。以下に、変化の中身について整理する。

##### ● ルート／立ち寄り場所

新門脇地区の盛土・区画整理や石巻南浜津波復興祈念公園建設の工事の影響により、南浜・門脇地区の道路事情は頻繁に変化することから、震災学習プログラムの実施にあたって、物理的制限の枠内で実施するための対応が必要になる。

例えば、初期の車両での案内は、旧門脇小学校近くにバス等を停めて一時下車することも多かったが、工事で駐車不可になったためルートを変え、車内や「がんばろう！石巻」看板付近で門脇小学校の話をするようになるなど、実際にその時々状況に応じて案内ルートを変化させてきた。また、施設の新設による変化もあり得る。

受入れ側は、数か月先、修学旅行では1年以上先の予約を受けざるを得ないこともある。約7年間、不安定な

状況下で、現地を下見したり日々情報収集を行うなど努力と工夫を積み重ねて、プログラムは継続されてきた。

##### ● 話す内容

震災前の街の様子や震災当時・直後の状況に関する説明は基本的には変化しないものであるが、震災後に地域で暮らす人の生活の状況や復興事業の計画や進捗はリアルタイムに刻一刻と変化していることから、ガイドが話す内容も変化する。特に、車両や徒歩で直に変化する地域を回る場合は、こうした変化に触れないわけにはいかないし、参加者から質問されることも多い。

例えば、復興祈念公園工事が進む南浜町を歩くプログラムでは、震災前の街の生活や被災の状況と併せて、これからどのような公園になっていくかということも基本的な説明内容に含まれていたり、公園完成後に一部遺される建物の基礎を地点を案内ルートに組み込まれている。いずれにしても、受入れ側の個人・団体には、正確な情報を収集し、わかりやすく説明する努力が求められる。

##### ● 複合化

車両での案内で展示施設に立ち寄ることは多いが、さらに南浜・門脇地区で下車したタイミングで短めの徒歩による案内をオプションで付けることができたり、展示施設での語り部と併せて周囲を歩く時間が設けられるなど、複合的なプログラムも見られる。新門脇地区の造成が完了し、2018年春に南浜町から盛土された新門脇地区に直接登れる避難階段が設置されたことから、それを活用して南浜町～新門脇地区～日和山を歩くコースが現実化し、実際に旧門脇小学校付近での案内や車両による案内との組み合わせも可能になっている。

提供する側の準備や調整の負担は増えるが、より深く多面的な学びを求めるリピーターを含む参加者の希望にも対応できるようになる。

#### 4. 震災伝承実践におけるソフト・ハードの関係

南浜・門脇地区という固有の地域における震災伝承関連施設およびそれらの集積によって構成される震災伝承拠点とそこで継続されてきた震災学習プログラムの実践とその変化の内容についてそれぞれ記述してきたが、両者は分断されたものではなく、様々な場面で明らかにに関わり、影響し合いながら運用されていることがわかる。

両者を関連付けて震災伝承活動が直面する課題に対応していくための議論の準備として、ここでは前者をハード、後者をソフトと位置づけてそれらの関係や相互作用の特徴について簡単に整理したい。

##### ● 機能の補完

ソフトの取組みがハードを活用し、遺構や展示を見学するだけよりも深い学びが実現されている一方で、ハード側はソフトの中身をより充実させるコンテンツを提供しているという意味で、両者は補完関係にあると言える。

南浜つなぐ館にプログラムで立ち寄るようになった語り部・ガイドは、震災前の街並み再現模型や震災直後の状況が見られるVRグラス、被災とその後の地域の様子や取組みを伝える動画が見られるシアターなどを各自選択的に利用し案内を行うが、これは被災の痕跡が見えづらくなったことや、震災遺構の旧門脇小学校付近での案内が様々な理由で難しいことに対応した代替の対応でもあり、互いの機能の補完の例とも言える。

### ● 質の向上と全体最適化

ソフト／ハードの間には市場原理に似た緊張関係も存在する。プログラムを提供するソフトの側、実質的には現場の語り部・ガイドのレベルで特定のハードを利用するか否かの選択権を持つことは、ハード側の質や利便性の向上を促す要因となる。一方、プログラムを有料で提供するソフト側は、多くの場合無料かせいぜい数百円で見学可能な震災遺構や展示施設を単に見学するだけでは得られない価値を参加者に提供し続けるための努力と工夫が常に求められる。

ソフト・ハードともに質の向上と両者の関わり合いのなかでの機能、役割や料金も含めた最適化につながる事が期待できる。

### ● 広く深い視点の提供

ソフト・ハード融合によって、特定地域に根差した情報に接する機会を持ちながらも、面的な広がり意識する拡張的な視点が喚起し得る。特に周遊型のプログラムでは複数のハード同士を結びつけることで、参加者は各所の個別の状況とともに、東日本大震災の特徴である広域に渡る甚大な被災の状況についても理解を深めることが可能になる。

自治体や旅行会社等が発行する震災伝承関連施設紹介マップや、震災学習プログラムの紹介パンフレット等では、従来個々のソフト・ハードの情報が得られるのみであったが、例えば南浜・門脇地区と併せて旧大川小学校校舎を訪問したいという希望が増えているといった状況に対応する意味でも、もう一段階踏み込んだ価値の発信について検討すべき時期に来ているともいえる。

ここではソフト／ハードを関連づけて考えた際に特徴として「機能の補完」「質の向上と全体最適化」「広く深い視点の提供」の3点を挙げたが、いずれも結果として利用者／参加者の受け取る価値の増大に寄与する内容となっている。ただし、これらが特徴が発揮されるにあたり、ソフト・ハード提供者同士のコミュニケーションが前提となっていることに注意しなくてはならない。

南浜・門脇地区における震災伝承活動に関しては、同地での活動中のコミュニケーションはもちろん、「参加型維持管理運営」検討協議会、あるいは旧石巻ビジター産業ネットワーク（現3.11メモリアルネットワーク）での議論と情報交換を通じて、追悼行事の共同開催や展示施設の平日開館希望への対応<sup>7)</sup>など、具体的な課題解決に向けて動いてきた経緯がある。ソフト／ハードの相乗効果を促し、震災伝承活動の継続を支えていくためには、今後もこうした公式／非公式のコミュニケーションの基盤は欠かせないだろう。

## 5. おわりに

本稿では、南浜・門脇地区の震災伝承実践の概況を通じ、ソフトとハードの要素を関連づけて議論する際に重要と思われる相互作用的な特徴について整理してきた。

今後、2020年度末までに復興事業は収束に向かい、変化はある程度落ち着く一方で、宮城県内だけで32件<sup>8)</sup>もの震災伝承関連施設が整備されるなど、この数年で震災伝承を取り巻く状況はさらに変化していきだろう。遠からず迎えるそうした状況を見据え、現場で日々課題に直面する語り部・ガイドが培ってきた力を活かし、ソフトとハードの力を融合させた震災伝承のあり方を考えてい

く必要がある。復興祈念公園内の中核的施設や旧門脇小学校校舎の設計に向けた動きも始まったが、そうした視点を持って進めていくことが肝要であると筆者は考える。

## 6. 謝辞

筆者の所属する公益社団法人みらいサポート石巻は南浜町において南浜つなぐ館を設置・運営しており、そこでの活動や復興祈念公園の「参加型維持管理運営」検討協議会の枠組みを通じて多くの情報接していることから、この度、南浜・門脇地区での震災伝承実践についてまとめることができた。様々な変化のなかでも震災伝承実践を継続されてきた皆さまの想いと日々の努力に敬意を表し、改めて感謝申し上げます。

また本研究は、日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学推進事業・実社会対応プログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的とした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」（研究代表者：佐藤翔輔）の助成によるものであることを記して、感謝いたします。

## 補注

- (1) 宮城県沿岸8市町10団体の震災学習プログラム参加者数の合計は、2013年の116,203名をピークに、それ以降右肩下がりであり、2017年にはピーク時の約半分の57,759名まで減少している。ただし、地域や団体によっては増加しているところもあるので、一概に「風化」などの言葉によつて理由づけられる現象ではないと考える。
- (2) 参考文献1)において、分析概念として「震災伝承拠点」が「個々の震災伝承関連施設から半径500mの円を基準とし、複数の震災伝承関連施設が描く円が重なり形成される範囲」と指定されていたが、本稿では特にそうした数値的な基準は用いない。
- (3) 有料のプログラム以外にも、行政機関の「市民活動拠点」視察や展示施設への立ち寄り希望グループへの無料の開館対応もしばしば行われているが、ここでは、それらのパターンは除外して考える。
- (4) 2018年3月に石巻南浜津波復興祈念公園「参加型維持管理運営」検討協議会の伝承部会に参画する6つの団体の間で施設の共同利用に関する新ルールが設けられたことで、この課題は部分的に解決されたが、細かな運用上の課題は残る。

## 参考文献

- 1) 浅利満理子, 中川政治, 佐藤翔輔「宮城県における震災学習プログラムに関する現状分析—東日本大震災と津波災害から6年間の震災伝承の特徴—」: 『地域安全学会論文集』No.31, pp.77-85, 2017.11
- 2) 佐藤翔輔「石巻市における震災伝承に関する3つの計画の策定プロセス」: 『地域安全学会東日本大震災特別論文集』No.6, pp.53-58, 2017.8
- 3) 石巻市「震災遺構検討会議（旧門脇小学校校舎）」, <http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10051100/9004/20170608180312.html> (2018.6.17閲覧)
- 4) 中川政治, 黒澤健一, 佐藤翔輔「石巻市における屋外伝承拠点の来訪者集計方法の確立と屋内外拠点への来訪者数の傾向把握」: 『地域安全学会東日本大震災特別論文集』No.5, pp.7-10, 2016.8
- 6) 復興庁, 宮城県, 石巻市「石巻市南浜地区復興祈念公園（仮称）基本計画」, 2015.8
- 7) 宮城県震災復興・企画部「東日本大震災の記憶・教訓の伝承について～東日本大震災と同じ犠牲と混乱を繰り返さないために～【東日本大震災の記憶・教訓伝承のあ方検討有識者会議意見取りまとめ】」, 2018.3